

平成25年度
宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国 語

注 意

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は、板書されている時間割のと通りの50分間です。
- 3 問題数は大きな問題が5問で、表紙を除いて10ページです。
- 4 解答用紙は1枚で、答え方はマークシート方式です。
- 5 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名を解答用紙のきめられた欄に書き、さらに受験番号をマーク欄にマークしなさい。
- 6 答えは、解答用紙に記載されている〔解答マーク記入上の注意〕、および試験開始前に行われたマークシート練習プリントにしたがって、ていねいにマークしなさい。
- 7 試験中に質問があれば、手をあげて監督者に聞きなさい。
- 8 監督者の「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおきなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある人、(注1)下人に、「(注2)内裏ちまきを買ふて参れ。」といひつけ
 たれば、「(承知シマシタ)心得申す。」とて内裏様へ参り、御門番の御前(門番ノ小屋ノ前ノ扉ヲ勢イ
 ヲ開ケテ)うちあけ、「ちまき買はふ。」といふ。番衆おかしく思ひて、
(a)「いか程にて買ふぞ。」と問へば、「百文にて。」といふ。
 御番の人々申さるるは、「(申シタナサルニハ)内裏ちまきは、一貫文より下にて
 は売らぬぞ。」といへば、「(b)げにも、此家づくりのていにて
 はさうあらふ事なり。」とて、宿へ帰り、しかじかといふた。
 物ごとに不にては、恥をかくべき事なり。

(「きのふはけふの物語」から)

- (注1) 下人ゲニン＝身分の低い召使
- (注2) 内裏ナリちまき＝もちを笹ササなどで包んだもの
- (注3) 内裏様＝皇居
- (注4) 一貫文＝一十文

問一

(1) (a)いか程(b)げにもの本文中での意味は、それぞれどれか。

- ア どのくらいの数量
- イ どのくらいの身分
- ウ どのくらいの値段
- エ どのくらいの希望
- ア 実際
- イ なるほど
- ウ そもそも
- エ さてさて

問二 ^①番衆おかしく思ひて、とあるが、その理由として適当なものはどれか。

- ア 高貴な人たちだけが食べることのできる「内裏ちまき」を、よりによつて「下人」がしきりに食べたがつていたから
- イ 「内裏」に似合わない「下人」が、その場の雰囲気(雰囲気)に圧倒されて言葉(言葉)を失つていたから
- ウ 見ず知らずの「下人」が突然現れ、凶々しくも「内裏ちまき」を買いに行こうと誘つてきたから
- エ 「内裏」では売っているはずもない「内裏ちまき」を、「下人」が得意(得意)気(気)に買いにきたから

問三

^②しかじかの内容として最も適当なものはどれか。

- ア 「内裏ちまき」は「内裏」では買えないこと
- イ 「内裏ちまき」が「百文」では買えなかったこと
- ウ 「御門番」の対応が親切であったこと
- エ 「内裏」が非常に立派であったこと

問四

^③いふた。の主語として適当なものはどれか。

- ア 御門番
- イ ある人
- ウ 下人
- エ 作者

問五

に入る語として適当なものはどれか。

- ア 本意
- イ 自由
- ウ 器用
- エ 案内

四

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

① ノーマン・マルコム(注1)の『回想のヴァイトゲンシュタイン』の中に、

ヴァイトゲンシュタインが、哲学をしばしば潜水にたとえた、という話が伝えられている。人間の体は、自然にしていると水面に浮かび上がる傾向がある。哲学的に思考するためには、その自然の傾向に逆らって、水中にもぐろうと努力しなければならない、といった話だった。この話を読んだとき、ぼくはこう思った。でも、ひよつとしたら、人間の中には、自然にしていると、**a** 水中に沈んでしまうような特異体質のやつがいるんじゃないか、そしてたとえばヴァイトゲンシュタインなんかがそうじゃないか、と。

人間を二種に分けるこの単純な分類が、そんなにまとはずれでないとする、哲学というものが人間にとって持つ意味は、実は二種類あることになる。水面に浮かびがちな人にとっての哲学と、水中に沈みがちな人にとっての哲学。

水面に **I** 人にとって、哲学の価値は、言ってみれば、水面下のようすを知ることによって水面生活を豊かにすることにあるだろうし、それしかないだろう。水面に浮かんでいるだけではつまらないし、人生に深みも出ない、**b** 水面下のようすも見てみたい、といったところだ。

でも、水中に **II** 人にとっての哲学とは、実は、水面にはいあがるための唯一の方法なのだ。ところが、水面から水中をのぞき見る人には、どうしてもそうは見えない。水中探索者には、何か

人生や世界に関する深い知恵があるように見えてしまうし、ときには逆に、そんな深いところに沈むことが、水面でのふつうの生活にとってどんな役に立つのか、なんて、水中にいる人が聞いたら笑いたくなるような（あるいは泣きたくなるような）問いが、まじめに発せられたりする。この二種類の人間にとって、哲学の持つ意味はぜんぜんちがう。

③ これまで、哲学の入門書といえば、決まって、水面に **III** 人に、水中のようすを紹介し、水中探索のおもしろさを味わってもらおうとするものだった。たしかに、テレビ・カメラを通して水中のようすを知るのは楽しい。もぐりかたによって水中のようすがまったくちがって見えることを知るのも愉快だ。でも、自分自身がともすれば水中に沈みがちな人間にとって、そんな哲学の入門書は、愉快でもないし、役にも立たない。

ところが、そういう入門書や教科書で紹介される哲学者という人種は、ほぼ例外なくともと水中に **IV** 連中なのだ。そういう連中はたいいてい、ときに（自己正当化のためだと思うけど）水中生活の意義を説いたりもするが、ほんとうは単に浮かび上がることでできなかつただけなのだ。

どんな入門書でも、口先ではみずから哲学することの重要性を説くけれど、そういいながら、実は哲学説の鑑賞の仕方を教えているにすぎないことが多い。哲学説（すでに哲学された他人の思想）をよく理解しよく味わって水面生活を豊かにすることと、自分で哲学する仕方を学ぶこととは、たぶん、なんの共通性もないのだ。④ 思想

(注3)

を享受することと思考を持続することとは、むしろ真つ向から対立する。ひとが哲学を必要とするふたつの道筋は、驚くべきことだが、
(c) まったく交差していないのだ。

思想を享受しようとする人は、決まって哲学に教えを読み取る。

哲学というものがあつて、何かをやっている。ちよつとのぞいて見ると、なにか深遠^⑤そうなことを言っている。これは人生の教訓にちがいない、というわけだ。哲学って何だかわからないけど、

(d) 世の中で意味のある何かをやっているにはちがいない、という前提に立つて哲学の排出物をのぞき込めば、そんなふうに見えてしまうのも当然だ。そして恐ろしいことには、哲学をした当人にしても、哲学をし終わって、上げ底が埋まった後では、自分のしたこの意味がわからなくなってしまうと、自分の思考の成果が何か人生にプラスされる教訓のようなものだったような錯覚を持つてしまうことがあるようなのだ。

ぼくがめざしたのは、自分が水中に沈みがちな人間にとつての哲学のやり方といったものだった。「 I 」ここでは哲学とは、(よい意味でもわるい意味でも) ふううとは違うものの見方へと誘うようなものではない。哲学をやった結果、独自の世界観を持つてふううのひとつより高い生き方ができるようになるわけでもない。現実の世の中の基準からみれば、ひとめぐりして、はじめてふううのひとつと同じ水準に達することができるだけのことだ。「 II 」そして、ぼくは実は、だれでも、どんな人でも、ほんとうは、それぞれのしかたで、水中に沈みがちな一面を持つのではないか、と思えてなら

ないのだ。「 III 」もう忘れてしまっただけで、ほんとうは、その人に固有の水面下というものがあつたのではないだろうか。いつもは忘れていただけで、ほんとうは、その人に固有の水面下というものがあつたのではないだろうか。「 IV 」

哲学はむずかしいと言われる。言葉がむずかしいからであるとか色々なことが言われているが、ほんとうの理由はそんなところにはない。哲学がむずかしく思われるのは、それが他人の哲学だからなのだ。そもそもそんな問いを持たなかつた人にとつて、その問いから発する思索なんて、こむずかしい屁理屈^{へりくつ}の山にしか見えないだろう。それでも頭のいい人は論理的には理解するだろうけど、こむずかしい屁理屈の山を理解するよるこびだけが残るにちがいない。

それに対して、自分の哲学ほどわかりやすいものはない。なぜつて、世の中で通用しているふううの考え方がわからないから、自分に理解できる考え方でそれをおぎなおうとしたとき、そこに生まれるのが哲学なのだから。どう考えたつて、これほどわかりやすいものがほかにあるはずはない。それどころか、^⑥哲学とは本来、究極のわかりやすさそのものことなのだ。

(永井均「子ども」のための哲学」から)

(注1) ノーマン・マルコム II アメリカの哲学者

(注2) ヴイトゲンシュタイン II オーストリアの哲学者

(ウイトゲンシュタイン)

(注3) 享受する II 受けとめて、自分のものにする

問一 ① ウイトゲンシュタインが、……伝えられている。とあるが、

筆者が「ウイトゲンシュタイン」の話を持ち出した理由として
適当なものを選べ。

ア ウイトゲンシュタインの哲学こそが、哲学そのものの本質で
あることを強調しようとしたから

イ ウイトゲンシュタインの哲学の比喻から、哲学に対するみず
からの考え方を展開させようとしたから

ウ ウイトゲンシュタインがたどえた哲学が、筆者自身の新しい
哲学を築き上げるための基礎となっているから

エ ウイトゲンシュタインの哲学で提示された二種の人間のうち、
一方の解明を目指していたから

問二 (a) から (d) に入る語の組み合わせと

して適当なものほどれか。

ア 「aちよつと bおそらくは cとにかく dどうしても」

イ 「aとにかく bどうしても cちよつと dおそらくは」

ウ 「aおそらくは bとにかく cどうしても dちよつと」

エ 「aどうしても bちよつと cおそらくは dとにかく」

問三 I から IV に入る語の組み合わせとして適

当なものほどれか。

ア I 浮かびがちな II 沈みがちな

III 浮かんでいる IV 沈みがちな

イ III I 浮かんでいる
IV II 沈みがちな

ウ III I 浮かびがちな
IV II 沈みがちな

エ III I 浮かんでいる
IV II 沈みがちな

問四 ② 水面から水中をのぞき見る人には、どうしてもそうは見えない。とあるが、「水面から水中をのぞき見る人」にとって「水中

探索者」はどのように見えるのか。適当なものを選べ。

ア 自分たちを哲学の世界へ導いてくれようとしているように見える。

イ 水面生活を豊かにするための深い知恵を持っているように見える。

ウ 自然の傾向に逆らって無理に哲学を思考しているように見える。

エ 水面での生活に非常に強いあこがれを持っているかのように見える。

問五 ③ 哲学の入門書とあるが、これに対する筆者の評価として適

当なものほどれか。

ア 他の哲学者の思想を学ぶものにすぎないので、自分で哲学する仕方を学ぼうとする人には役に立たない。

イ 哲学者の人生観や世界観を理解できるので、自分の水面生活を豊かにするには必要だ。

ウ むずかしい言葉で書いてあるので、何か教訓を得られたような錯覚を読む人に持たせる。

エ 単なる押し付けにすぎないので、自分の哲学をする上ではかえって不愉快なものだ。

問六④ 思想を享受することと思考を持続することとあるが、その内容として適当なものとはどれか。

ア 哲学者の知恵を自分のものにしようと努力することと、自分の哲学を世の中に普及させようとする事

イ 既成の哲学を他人の解釈に従って理解しようとする事と、その中の不明な部分について自分で考えていこうとする事

ウ 人生上の教訓を哲学者の書物の中に読み取ることと、独自の世界観でふつうのひとつより高い生き方を目指そうとする事

エ 他人の哲学に教えを読み取って人生の教訓にすることと、哲学のやり方を学んでみずから哲学すること

問七⑤ 深遠そうなこととあるが、本文中での意味として適当なものはどれか。

ア 今までにない秘密めいたこと

イ とてもよきそうなこと

ウ 容易にはかりしれなさそうなこと

エ 言葉では表現できそうもないこと

問八 次の一文が入るところは、本文中の「Ⅰ」から「Ⅳ」のどこか。適当なものを後から選べ。

つまり、水底まで沈みきることによって、はじめて浮かび上がってくる方法、といったものだ。

ア 「Ⅰ」 イ 「Ⅱ」 ウ 「Ⅲ」 エ 「Ⅳ」

問九⑥ 哲学とは本来、究極のわかりやすさそのもののことなのだ。とあるが、その理由として最も適当なものとはどれか。

ア だれもが固有の水面下に保持しているものであり、それゆえ自分自身でしか模索できないものが哲学であるから

イ こむずかしい屁理屈の山を、世の中で通用しているふつうのやり方で理解していくことが哲学であるから

ウ 他人の思考に関わりなく、自分自身の方法で考えていくことが哲学であるから

エ 他人の哲学を理解したうえで、その人固有の問題を解決して作り上げられた独自の世界観が哲学であるから

五

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私は家の事情で、両親や弟妹たちと離れて、小学校六年生まで「おぬい祖母」のところで暮らしていた。

おぬい祖母が他界したのは私の小学校六年の時で、おぬい祖母が亡くなってから私は初めて郷里を出て、両親や弟妹で構成されている家庭の中には行って行ったのである。そして父の任地の中学へ進んだが、父の転勤によって、家族と一緒に生活する期間は一年足らずで断ち切れ、私は郷里に近い小都市の中学に転じて、その寄宿舎へはいらねばならなかった。中学を出てからの浪人生活一年と、高校の一年間、併せて二カ年家族と一緒に暮らしたが、この時もまた父の転勤に妨げられてしまい、それ以後ついに両親や弟妹たちと一緒に生活を持つことはなかった。従って私は父にとっては、一緒に暮らすという点では縁の薄い子供であったが、父は私に対して、^①ずつと膝下^{注1}において育てた三人の子供たちとみじんも分け隔てすることはなかった。いかなる場合も公平であったし、それも（ a ）そうするのではなく、手離しておいたから愛が薄いか、手許で育てたから愛が深いとかいったそういったものは、父の場合もともと持ち合わせていないものようであった。自分の子供たちと親戚の者たちを並べてみた場合も、同じようなことが言えた。不思議なほど愛情の使い分けといったものは見られなかった。極端

に言えば、自分の息子や娘たちも、全く血縁関係のない最近知り合った者たちも、^②さして区別のないようなところがあつた。子供たちには^③そうした父親が冷たく見え、第三者には暖かく見えた。

父は七十歳の時癌^{がん}に罹^{かか}り、一応その手術に成功したが、十年後に再発して半年程度床についていて、次第に衰弱して行った。高齢であつたので手術は見合わせねばならなかった。死は（ b ）時間の問題で、今日か明日かという日が一カ月近くも続いた。息子や娘たちはそれぞれ喪服を郷里の家へ運び、あとは何となく病人の最期^{さいご}を待つような格好で郷里と東京の間を往復した。私は父の死の前日父を見舞い、（ c ）四、五日は持ちこたえそうだという医師の言葉で、その晩東京へ帰つたのであつたが、その間に父は息を引き取つた。最後まで父の頭はしっかりしていて、見舞客に出す食事から、自分の死亡通知に関することまで周囲の者にこまごまとした注意を与えていた。

父と最後に会つた時、私がこれから東京へ帰るが、二、三日したらまたやって来るといふ挨拶^{あいさつ}をすると、父は^④やせ細^{ほそ}つた右手^{みぎて}を布団^{ふとん}のなかから私の方へ差し出してよこした。これまでにこのようなことをしたことはなかったので、私はとっさの間に、父が何を求めているか判断がつかなかった。私は父の手を自分の手の中に収めた。すると父の手は私の手を握つた。二つの手は軽く握り合わされた格好になつたが、次の瞬間、私は自分の手が軽く突き返されたような感じを持った。釣りの時、竿^{さお}の先端^{せんぽん}にびくつと来る^{注2}あたりの感じであつた。はつとして私は自分の手を父の手からはなした。どう理解

していいか判らぬが、しかし、確かにそこには父の瞬間の意思というものがこめられてある感じであった。「Ⅰ」いい気になって、父の手を握り、冗談じやないよと、つと突き離されでもしたような冷んやりとした思いがあった。

この事件は、父の死から日が経つても、ある期間私の脳裏から消えなかった。私はこのことにこだわって、あれこれ考えて時間を過ごすことがあった。父は自分の死が近づいたことを知り、私に父親としての最後の親愛の情を示そうとして手を差し伸べて来たのかもしれない。そして私の手を握った瞬間、ふいに自分のそうした気持ちの動きに厭悪を感じて、私の手を押しやってしまったのである。④
こういう解釈もできた。私にはこれが一番自然に思われた。もしそうでなかったら、父親は自分に応える私の手の出し方に何か気にくわぬものを感じ、自分が示そうとした親愛の情をたちまちにして引き返めて、私の手を離れたのかもしれない。Ⅱ
そのいづれであるにしても、父親が私の手をそれと感じるか感じられぬような微かな突き放し方において、急に近まった私との距離をふいにまたもとに戻してしまったということだけは確かであった。⑤
私はそうした父親を父親らしいとも思い、それはそれで父親らしくていいとも思った。

しかし、また一方で、私は自分の手で父の手を突き放したのではないかという思いをも払拭することはできなかった。手を離れたのは父親の方であったかも知れないと同時に、私の方であったかも知れないのである。冷たいあたりの感触は父親の全く知らないことで、

一切私の負うべきものであるかも知れなかった。「Ⅲ」そうでないと切り切る根拠はなかった。この期になつて、(d)甘えるのはあなたらしくない。子供の私などに、手を差し伸べて来てはいけない。「Ⅳ」こうした解釈は、それに取り憑かれる度に私を苦しめた。

⑥
私は、だが、この父親との小さい事件をめぐって、ああでもない、こうでもないと思いを廻らす作業から、やがて解放されることのできた。この解放は何の前触れもなしに、ふいに私のところへやって来た。父親もまた、墓の中で、私と同じような思いに駆られて、父親と私とのほか誰も知らない、それを判らぬかのようなあの小さい取引の意味を考えているかも知れないと思つた時、私は急に自分が自由になるのを感じた。私と同じように父もまたあの世で、あの小さいあたりについて、思いを廻らしているかも知れないのだ。⑧
こうした想像の中で、私は初めて父親に生前感じなかったような子としての自分を感じた。自分は父の子であり、父は自分の父であると思つた。

(井上靖「花の下」から)

(注1) 膝下 親もとで生活していること

(注2) あたり 魚がえさをつついた時の手ごたえ

(注3) 厭悪 不快さ

(注4) 払拭する すすつかりぬぐいさる

問一 ① みじんも、② さしての本文中での意味の組み合わせとして適当なものとはどれか。

- ア 「① ほんの少しも ② たいして」
イ 「① 意外にも ② とりあえず」
ウ 「① 全く変わらさず ② 今以上に」
エ 「① 時と場合によって ② さしあたって」

問二 ③ 父親が冷たく見え、とあるが、その理由として適当なものはどれか。

- ア 父親として子供たちを遠くから見守ろうとしていたが、子供たちにはその思いが理解できなかったから
イ 周囲に依存する生き方を嫌っていたため、子供たちの愛情さえも受け入れようとしなかったから
ウ 転勤で留守にすることが多いため、自分から子供たちと距離を置こうとする気持ちがあったから
エ 自分の子供だからといって特別な愛情を注ぐことなく、誰にでも同じように接していたから

問三 (a) から (d) に入る語の組み合わせとして適当なものとはどれか。

- ア 「a いまだ b 今更 c 全く d 強いて」
イ 「a 全く b 強いて c 今更 d いまだ」

- ウ 「a 強いて b 全く c いまだ d 今更」
エ 「a 今更 b いまだ c 強いて d 全く」

問四 ④ これの指し示す内容として適当なものはどれか。

- ア 私も父親に対して愛情を示そうとしたが、父親はその私の気持ちを拒否したのだという考え
イ 父親は私に最後の親愛の情を示そうとしたが、それを急に自ら思いとどめたのだという考え
ウ 子供に甘えるような父親を見たくない、私が自分から父の手を突き放したのだという考え
エ 父親は自分の死が近づいたことを知り、最後に私に親愛の情を示そうとしたのだという考え

問五 次の一文が入るところは、本文中の「Ⅰ」から「Ⅳ」のどこか。適当なものを後から選べ。

そして私はいったん握った父の手を、そっと父の方へ返してやったかも知れないのだ。

- ア 「Ⅰ」 イ 「Ⅱ」 ウ 「Ⅲ」 エ 「Ⅳ」

問六 ⑤ 私は……：……父親らしくていいとも思った。とあるが、その理由として適当なものほどれか。

ア 自分の弱さを見せまいと私との距離を遠ざける態度に、父親の気丈さを感じたから

イ あくまでも私との距離を保とうとする態度に、一貫した父親の信念を感じたから

ウ 体が衰弱していった今も私との距離をつくろうとする姿に、父親としての威厳を感じたから

エ 私との距離をさらに遠ざけた姿に、別れの辛さを隠そうとする父親の弱さを感じたから

問七 ⑥ 私を苦しめた。とあるが、その説明として適当なものほどれか。

ア 父の死後も、自分が父の手をはらいのけたというまぎれもない事実じじつに思い悩まされている自分を情けなく感じている。

イ 父の手を突き放した行為はとっさに出た自分の本心の現れではなかったかと考え、自分の冷淡さに戸惑いを感じている。

ウ 自分は父親とは正反対の性格だと思っていたが、似た態度を無意識むいしに取っていたことを嫌悪けんおしている。

エ 手を突き放したのは自分の方かもしれないと考え、父親に申し訳ないことをしてしまったと自責の念にかられている。

問八 ⑦ 小さい取引きとあるが、その内容として適当なものは、本文中の **ア** から **エ** のどれか。

ア 父はやせ細った右手を布団のなかから私の方へ差し出してよこした

イ 二つの手は軽く握り合わされた

ウ 自分の手が軽く突き返された

エ 私は自分の手を父の手からはなした

問九 ⑧ 私は初めて……：……子としての自分を感じた。とあるが、その理由として適当なものはどれか。

ア 二人が共有する小さい事件を父親も大事にしているはずだという想像が、自分の気持ちを楽にさせてくれたから

イ 父親が最後に自分に親愛の情を示してくれたという想像が、父親への感謝の気持ちを生んだから

ウ 父親も自分と同じように思い悩んでいるという想像が、自分と父親との絆を感じさせたから

エ 父親は自分らしさを死ぬまで貫いたのだという想像が、父親の子であることに対する誇りを感じさせたから